# じんだい

第63号

2021.5.17（月）

発行：医療法人社団　欣助会　吉祥寺病院

調布市深大寺北町4-17-1　☎042-482-9151
URL　www.kichijoji-hospital.com

## 基本理念

患者様やご家族の側に立った医療
患者様の社会復帰を目指す医療
全職員相互の力を発揮できる医療

満開の桜

## Contents

新年度のご挨拶……1
吉祥寺病院における新型コロナウィルス感染症への対応……5
本能寺からお玉ヶ池へ ～その⑦～ ……6
“冬だって乗りきるぞ！”職員イベント ……9
当院のおすすめメニュー…… 10
外来担当表 / 当院略図 / 編集後記 …… 11

# 新年度のご挨拶

院長　塚本　一

明けましておめでとうございます。

昨年はコロナ禍一色の一年でした。

昨年1月に中国武漢市で原因不明の肺炎が流行しているという話から、2月にはダイヤモンドプリンセス号で集団感染が始まり3月には日本国内でも感染が騒がれ始めました。3月11日に世界保健機関WHOがパンデミック（感染症の世界的大流行）を宣言しましたが、イタリアや欧州で爆発的に感染が広がり医療も崩壊し多くの死者がでました。

日本でも感染拡大を受け政府が4月7日緊急事態宣言を発令し、当初東京都などの都府県が対象でしたが16日に全国に拡大しました。

都道府県は市民に外出自粛を呼びかけ、商業施設など幅広い業種に休業を要請し、繁華街や駅から人の姿がめっきり減りました。

街ではマスクや消毒用アルコールなどの品薄が続き、病院では入院病床や医療物資の不足が問題となりました。

5月下旬に緊急事態宣言は全面解除され、4月初旬をピークに流行の第1波は凌ぐことができました。しかし6月下旬より再び新規感染者数が増加し7月下旬をピークに第2波もおさまりましたが新規感染者数は高止まりのままでした。冬を迎え10月中旬頃より再び新規感染者数が増加し、現在過去最多数を更新しています。

社会的距離の確保やマスクの着用など新しい生活様式が浸透し、自宅などで勤務するテレワークや3密を回避する動きが広まりましたが、外出の自粛や在宅勤務、家庭内の変化や経済活動の停滞などをきっかけに、それまで潜在していた問題が一挙に爆発する形で7月から自殺者数が急増しており、特に女性の自殺者が増えているのが気になります。

新型コロナウイルス（COVID-19）の流行のため昨年開催される予定であった東京オリンピック、パラリンピックは1年延長となり、アメリカでは猛威をふるう新型コロナウイルスの対応不備（アメリカでは死者数30万人以上）などの影響でトランプ大統領が11月の大統領選で破れ、1月にはバイデン新大統領が誕生します。

7月に苦境に陥った観光業界を支援するため「GoToトラベル」事業が始まりましたが、感染拡大をうけ年末年始の全国一斉停止に追い込まれました。

新規感染者数の増加は止まらず、過去最高が続いており、いつどこで誰が感染してもおかしくない状況となっており、経済活動と感染対策の両立という難題に直面しています。

吉祥寺病院はB棟をリフォームして心機一転した矢先にコロナ禍となりました。コロナ禍で新規入院患者をひかえたり、クラスターが発生して新規入院をとれない病院などのため当院では新規入院患者の依頼が増え、精神科救急システムを守るためにも入院が必要な患者さんは積極的に受けるよう努力しました。

その中で7月下旬、警察官につき添われ保護室に入院した患者さんが新型コロナウイルスの新規感染者だということがわかりましたが、他患やスタッフからはPCR検査陽性者を出さずにすみ、松沢病院などの協力で事なきを得ました。

今後もウイルスの侵入を防ぐため手指消毒、マスクの着用、3密をさけるなどスタッフ全員に徹底していきますが、スタッフにはかなりの負担がかかっています。

そのため昨年はスタッフ向けイベントとしてアイスクリームのキッチンカーを頼んだり、豪華お弁当イベントを開催したりもしました。

精神科病院でコロナ感染に対応するためにはゾーニングと個人防護具の着用しかないと考えます。精神科二次救急ではコロナ感染疑いの患者さんも入院するため今年1月から4床室2部屋を個室8部屋へ改修します。

吉祥寺病院ではここ数年組織力強化に力を入れてきました。

東京都内で精神科専門医になるための専攻医の数は専門医機構により制限されています（地域間格差をなくすため医師の集まる東京での専攻医育成を制

限し、地方へ医師を配置するため)。

そのため当院で専攻医を育てようと昨年より専門医教育基幹病院となり今年4月より新たに2名の専攻医が入局します。

専門教育については今までも帝京大学や杏林大学の医学部生が病院見学実習に来ていましたが、今後も一層力を入れていきたいと思っています。

また今まで専門教育以外にも管理者を養成するため人材育成研修にも注力してきましたが、今年初めて当院から介護老人保健施設花水木の中核管理者である介護部長、介護部付介護長を出すことができました。

組織力を上げ、引き続き吉祥寺病院、老健花水木をより良い施設にしていこうと考えていますので宜しくお願い致します。

# 新年度を迎えるにあたって

参与　伊藤 久代

2019年12月中国武漢からは始まった新型コロナウィルスの感染が世界的なパンデミックとなり、日本でも3月から感染者が急増し、4月8日から5月まで緊急事態宣言が発令されました。当院でも東京都や国から出された感染防止対策に沿って、インフェクションコントロールのチームを中心に感染予防のための対策が取られました。都内のいくつかの一般科の医療施設でクラスターが発生し、感染防護具や手指消毒剤が不足する中、自院でクラスターが起ったらどうなるだろうとひやひやしながら、とにかくできる事をと標準予防策の徹底や個人防護具の着脱、ゾーニングなどの訓練を実施しました。厚労省から徐々に個人防護具が配布されるようになり、7月末にはある程度確保、備蓄されてきましたが、N95マスクが配布されはじめたのは8月末でした。

緊急事態宣言解除後は患者さんの外出制限や面会制限なども感染対策への協力を得ながら、少しづつ緩和し、日常の療養生活が保持できるようになりました。感染対策は充分にしてきたつもりだったのですが、8月に一人の患者様、第3波の起る12月下旬からクラスターが起こり、収束するまでの1か月間、該当病棟の職員、患者さんにはほんとうにストレスの多い体験をさせてしまいました。さいわい重症になる方はおらず、転院治療した患者さん、自院で治療した患者さんとも2週間前後で回復されました。患者さんは1か月間全く病棟から出ることが出来ず、精神的なストレスもそうですが、病棟外に出られない事で体力が低下し、作業療法科では収束後に体力回復のためのメニューを入れた作業療法を実施してくれました。看護職員たちには毎日毎日消毒とゾーニングの繰り返しで自分たちも感染するリスクと不安を抱え、やってもやっても感染者が出るといった見通しの立たない不全感の中でつらい思いをさせました。他病棟の職員、他部署の職員の方たちには転院の調整、転院、帰院の付き添い、ジュースなどの買い出しの応援、職員への差し入れなどさまざまな配慮や応援をいただきました。クラスターが収束して2か月経ちましたが、メンタル面で日常がもどるのは大変だと思っています。今回のクラスターでの教訓は今後の感染対策等に活かしていきたいと思います。

コロナ禍でいろいろな事が変わりました。学生時実習は5校の実習のうち3校は臨地実習が中止で学内またはリモートでの実習でした。臨地実習が出来た学校も実習時間、日数を半分にして臨地と学内を組み合わせた実習でした。精神科に入職してくる新卒は学生実習で精神科の面白さを知って入職してくることが多いので臨地実習を経験できないことが新卒採用に影響が出ないかと心配しているのですが、21年4月採用は応募者も例年と変わりなく6名の採用が出来ました。22年4月の採用も2月末くらいから病院見学者がすでに10名あり、大きな影響は今のところはないかなと思っています。業者での就職説明会も今年はWEBでの説明会です。地方からの就職説明・病院見学の申込ではWEBでの説明の希望もあり、環境を整えてWEBでの就職説明会も実施の方向で考えていかなければと思っています。

看護部の院内の研修は1つを除き、密を避けながら

ほぼ予定通り実施できました。院外の研修や学会はほとんどWEBになり、研修の参加は従来より減少しましたが、学会発表は2題できました。

これからもコロナ禍はしばらく続くでしょう。WEBでの研修や学会参加、就職説明会もそうですが、移動しないで病院や自宅から参加できるというメリットがあります。学生の臨地実習も実習時間を短くしてもやり方によってはむしろ効果的であったという評価がされていました。コロナ禍で経験したことはこれからの新しい日常となっていく事がたくさんあるのかもしれません。今年度は機能評価受審と電子カルテの導入があります。コロナとも戦いながら看護部職員始め全職員協働して頑張っていきましょう。

私伊藤は3月末で看護部長を退任いたしました。この12年間、看護部長としてその責務が果たせたのかと振り返ると決して充分とは言えないと思っていますが、看護職員、他部門の皆様等に支えられながら勤めることができたと思っています。ありがとうございました。

4月からは参与としてしばらくお手伝いをさせていただきます。よろしくお願いいたします。

# 令和2年度を振り返る

**事務長　根岸 麻矢**

毎年、新年号をお届けしておりますが、新年号を制作しているちょうど同じ期間に当院で新型コロナ感染症のクラスターが発生しました。詳しくは院長の原稿に譲りますが、これを理由に今回は新年号と春号の合併号となっておりますので、ご了承ください。

さて、昨年度の吉祥寺病院基本目標は「リ・スタート！～多様性に対応しよう～」でした。

B棟改修工事が終わり、工事中にできなかったことが出来るようになり設備も心も新たに再開するという意味でリ・スタートです。病院全体の病床が本格的に動き出すと、救急病棟と急性期病棟を軸にして病床回転率が上がっていきます。急性期の入院が多くなると必然的に統合失調症だけでなく様々な病名の方や様々な生活環境の方がご入院になりますので、我々職員も多様性に対応する取り組みが重要になります。そうやって次年度の基本目標は生まれ、これを掲げた後、それを達成するために何をするのか具体的な目標設定を行います。

病院の目標は　1．経営の安定化　2．医療の質向上を目指す　3．地域連携と地域精神医療の充実を図る　4．やりがいの持てる職場づくりを目指す　この4つの視点を基準に考えるようにしています。毎年私の原稿に登場する「企画運営会議」という目標達成のために生まれた会議体では、それぞれの項目を具体的にします。主に数値目標が多いのですが、入退院数と病床運用に関する昨年度の年間目標は達成できていません。これは当院だけに限ったことでなく、年間通してみると、どこの病院でも新型コロナウイルス感染症の影響は多きかったと思います。今年度は基本目標に掲げていませんが、リ・スタートですね。

さて、昨年度はクロザピンを新規導入だけでなく一定件数導入することを目指しました。結果は目標数に届きませんでしたが、診療報酬改定に合わせて目標を立て達成することは経営の安定化にもつながり、医療の質向上にもつながります。さらに経験が重要なので今年度も引き続き目標にしています。医療の質向上と具体的数値目標は企画運営会議Bチームが中心になって試行錯誤しています。

数値目標だけでなく目標は設定しています（院長の原稿と同じにならないよう、院長の記載したものは割愛します）。地域連携目標は企画運営会議Aチーム（営業チーム）が検討します。昨年は近隣医療機関との連携強化を具体的目標にしていました。夏以降定期的に近隣医療機関に連絡し、伺いたい旨お伝えしていましたが結局昨年度内は一度もご挨拶にお伺いできませんでした。ここでも新型コロナウイルス感染症の影響は大きなものでした。しかし、Aチームは営業先に伺えない時間を利用し、パンフ

レットの改訂に着手していました。さすが営業の鏡ですね(ところで、当院の営業チームは営業マンを雇っているわけでなく、医師・看護師・精神保健福祉士・事務ら現場職員ですので、念のため)。
数値目標でないものは、他に「やりがいの持てる職場づくりを行う」ことです。これは、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るった1年間の間に企画運営会議Cチーム主催で2回実施したイベントです。詳しくは別ページのイベント原稿をご覧ください。

直接職員のやりがいにつながったかどうかはさておき、どこへも外出できないおしゃべりもできない環境がずっと続いている中で、たまにやってくる非日常が気分転換にはなったと思います。職員の皆さんは新型コロナウイルス感染症のなか頑張っているのですから、今年も元の環境に戻っても、戻らなかったとしても絶対に何らかのイベントは開催したいと思いますので今年の目標にも載せました。

最後に、昨年度初めて目標に掲げた防災管理についてです。平時に災害対策について定期的に話し合いルール作りをすること、災害時に直ぐに対応できる定期的な訓練を実施することを目的に防災対策部会を設置しました。毎月1回定例会を行い、会議の中では当院の備蓄品やマニュアルを見直すところから始めました。月1回集まる時間で出来ることは限られていますので、昨年度は当院の防災設備や備品を把握したうえで現状を共有し、問題点を抽出するところで終わってしまいましたが、今年度も引き続きマニュアル完成まで実施してまいります。ところで、防災対策部会の特徴の一つは東京DPATメンバーが参加していることです。昨年秋に院内開催した大規模災害想定避難訓練にはオブザーバーとして火災発生想定現場と防災センターを見学していただき課題を抽出してもらいました。また、当院は調布市災害医療救護所の一つのため、救護所で使用するテントの運搬から組み立てと片付けまで一連の流れと、災害用通信機器訓練を経験しました。さらに、災害時に使用する公的機関との情報ツールである広域災害救急医療情報システム(E-MIS)訓練へも定期的に参加していただいてます。コロナ禍でほとんどの外部研修が行われず訓練をする機会がありませんでしたが、今年も引き続き当院の防災管理を強化するため活動していただきたいと思います。

昨年同様、新型コロナウイルス感染症の影響は続いております。私たちはそのような環境の中でもいつもと変わらない業務を遂行するために、新しいスタイルを作り出そうとしていますので、今年度もよろしくお願い申し上げます。

# 吉祥寺病院における新型コロナウィルス感染症への対応

院長　塚本 一

令和2年は新型コロナウイルスのパンデミックにより世界中が大きく影響を受けました。

令和元年12月に中国武漢から発生した新型コロナウイルスは、瞬く間に全世界に広がり、日本では2月のダイヤモンド・プリンセス号での集団感染に始まり3月には日本国内でも感染が広がりました。

吉祥寺病院では院内感染対策室が2月25日に「新型コロナウイルス感染における当院の対応について」という院内報の第1報を出しました。内容は現時点で判明している新型コロナウイルス感染症についての情報と院内及び職員の対応を決めた文章でした。2月27日には第2報としてより細かく院内と職員の対応を記載し、同時に臨時院内感染対策委員会 *1を開催し全部署へ周知しました。

2月、3月はマスク、アルコール、個人防護具なども不足しており、物資の確保に奔走しました。

3月24日に小池都知事の「都民の不要不急の外出自粛要請」を受け院外実施の行事を取りやめ、歓送迎会などの宴席も全て中止し、職員へも自粛をお願いしました。

4月2日の第3報では発熱者への対応、措置入院の面会制限、ラウンジ利用の中止を伝え、4月10日の第4報では緊急事態宣言に伴う当院の基本的考え方や外来・入院の患者様対応、職員への対応を伝え、臨時運営会議 *2も2回開催しました。

5月の臨時運営会議では院内で感染者が発生した場合の課題を話し合い、病棟で発生した場合や医局の体制、外来での対応などを確認しました。
その後も院内報は第6報まで発行し、臨時運営会議も随時開催していました。

7月14日には都立松沢病院の新型コロナ感染者専用病棟を院内感染対策室長の田澤先生と見学させて頂き、ゾーニング（清潔区域と汚染区域の設定）の実際と個人防護具の保管・管理・着脱などについての指導を受けました。

専用病棟とその動きを実際に見せて頂き、当院で感染者に対応するためにはゾーニングと個人防護具しかないと実感しました。精神科二次救急でコロナ疑いの患者様を受け入れる急性期治療病棟ではゾーニングのため4床室2部屋を個室8部屋へ変更することと、職員に個人防護具の着脱訓練を行うことを決めました。

このように感染対策を考え警戒している中、初めての感染者がみつかりました。

7月29日精神症状が著しく警察官につき添われ保護室に入院した患者様でした。発熱や呼吸器症状は認められず、新型コロナウイルス感染症を疑う症状は全くありませんでした。しかし他の身体合併症のため8月3日一般病院へ転院させたところ、その病院での入院時検査で新型コロナ陽性と判明し、8月4日に当院へ連絡が入りました。すぐに院内感染対策室のメンバーを加え、臨時運営会議を開き保健所へ連絡しました。また転院時救急車に同乗した看護師と担当した医師を当院で濃厚接触者と判断し、即日、調布東山病院でPCR検査を施行してもらい、看護師は自宅で医師は病院別室での待機となりました。

当院ではPCR検査ができなかったため調布市医師会の西田会長に相談したところ、翌日の8月5日には西田会長、嵐副会長、麻生理事の3名が当院へ来て下さり、真夏の炎天下の当院駐車場で接触のあった職員、当該病棟看護師等37名にPCR検査を実施して下さいました。

同日保健所スタッフ3名も来て下さり、状況や病棟を確認し、濃厚接触者を確定しました。

PCR検査の結果は全員陰性で、濃厚接触者に関しては2週間自宅待機としましたが、体調の変化は認められず、1回目の感染者に関しては無事収束することができました。

今回感染者が出た状況で一番困ったのは、当院でPCR検査ができないことでした。現状を改善するため東京都とも交渉し、9月16日には当院でもPCR検査が可能な体制を構築することができました。

年も押し迫り12月26日（土）の夕方に女子閉鎖病棟で勤務している看護師の1人がPCR検査陽性とわかり28日（月）に当該病棟の全看護師・全患者様、また病棟担当の相談員、作業療法士など87名にPCR検査を実施しました。

29日の20時過ぎに看護師3名・患者様6名の陽性が確認でき、21時から当該病棟のゾーニングを行いました。30日には9時より院内感染対策室メンバーを加え、臨時院内感染対策委員会を開きました。

当該病棟に勤務する職員の食事や更衣室を別の場所へ移動し、患者様への食器はデスポに変更しまし

た。また配膳や対応など全てについて確認しました。31日には事務長、相談室長などを中心に発熱が続く方やSpO2(酸素飽和度)が悪化する方などを優先的に転院させる準備を続け、令和3年1月1日には青木病院へ2名、2日には都立松沢病院へ1名、3日には青木病院へ1名と転院させることができました。

4日に再び当該病棟の全看護師・全患者様のPCR検査を実施したところ、12月28日には陰性であった看護師・患者様の中から新たに18名(看護師2名・患者様16名)の新規感染者が見つかり、当該病棟は病棟全体をレッドゾーンとする新しい体制での感染対応となりました。

対応については保健所と逐次相談しながら院内感染対策室を中心に行いましたが、転院要請では保健所が手一杯で、東京都精神保健医療課が主に動いて下さいました。

東京都と協力病院のおかげでスムーズに転院でき、その後もポツリポツリと新規感染者がみつかりましたが、1月15日を最後に状態も安定し、1月30日に終息宣言を出すことができました。

1月1日に転院した患者様は1月12日には帰院され、転院した患者様は総勢17名(青木病院6名、都立松沢病院9名、国立精神・神経医療研究センター病院2名)でしたが、全員無事回復し、1月26日までには全員当院へ戻られました。

12月29日に10人のクラスターが発生した時点で感染経路を確認しましたが、6名の患者様は皆それぞれ部屋が違い、食事の場所や受け持ち看護師等にも共通点がなく、どのように広がったのかわかりませんでした。

保健所とも相談し、看護師同士の感染は、古い病棟でナースステーションも狭く空気の流れで吹き溜まりができていることに気づき、ナースステーションの一番奥の天井に換気扇を増設することにしました。

また患者様同士の感染については、女子病棟でもあり洗面所を頻回に使われる方も多いため、洗面所のカランを介しての感染の広がりがもっとも疑われるため、手動であったカランを自動のものに改修する予定です。

今回のクラスター発生を経験し、PCR検査で1人陽性が出た場合、すでに水面下で広がっている場合が多く、対応が後手後手にまわり、少人数のうちに感染の広がりを抑えることはとても難しいと実感しました。

当該病棟のスタッフはもとより、医局・相談室・他病棟のスタッフ、作業療法室、薬局、栄養科、事務など全スタッフの協力でどうにかクラスター(職員7名・患者様30名)を乗り越えることができました。

精神科病棟は閉鎖された空間で多くの患者様が自由に移動し、また指示に従えない方やご自身では衛生管理ができず感染予防できない方もいらっしゃいます。

そのため精神科病棟は感染を制御することがとても難しい環境です。そういう状況でとりわけ院内感染対策室と当該病棟スタッフが頑張り、患者様も協力して下さり、他病棟への感染を広げず、当該病棟全体がレッドゾーンという過酷な環境の中で、1ヶ月という短期間で感染を収束させたことに本当に感謝しています。

現在、東京精神科病院協会の会員病院は65病院ありますが、41病院で感染者を認め11病院でクラスターが生じています。今後再びクラスターが発生することがないよう気を引きしめてまいりたいと思います。

*1) 院内感染対策委員会…全部署長合同会議。院内感染対策室(ICT)会議からの情報をもとに院内感染予防、発生時の対策を検討し、運営会議に決定を委ねる。

*2) 運営会議…関連部署長が病院の運営に関する決定を行う。月2回の定例会に加え、急ぎの検討事案がある場合は臨時で開催する。

## 本能寺からお玉ヶ池へ ～その⑦～

医局　西岡　暁

幸か不幸か、今年へ跨った大河ドラマ「麒麟がくる」ですが、2月に到頭(とうとう)その幕を下ろしました。
あれから400年余……、それでも私たちは、相も変わらず「麒麟がくる」のを待っています(?)。
そして、パンデミックの嵐の中でも、春はまた廻ってきました。

*散る桜　残る桜も　散る桜*　(良寛)

320年前の春、4月21日(旧暦3月14日)、江戸城中で赤穂藩主浅野内匠守(たくみのかみ)が高家(こうけ)旗本吉良上野介(きらこうずけのすけ)に斬りかかりました。「忠臣蔵」で有名な赤穂事件のきっかけになる事件です。

ところで、「蕉門四天王」の一人にして「蕉門十哲」筆頭と言われる宝井其角は、師匠の芭蕉さん自らが「門人に其角嵐雪あり。」ととても高く評価した俳人です。　其角には、

*月花を医す　閑素幽栖の　野巫の子有り*

という自虐的な（と見せて自負を表明した？）句があります。ヤブ医者の子で詫び住いの自分は、人ではなく「月花」の医療をしている、と嘯いているのです。その其角の生家があったのは、江戸・神田お玉ヶ池と言われています。（本当は、日本橋堀江町説の方が有力ですが…）

其角は「赤穂47士」の一人・大高源吾の俳諧の師匠で、この師弟には、討ち入り前夜に（お玉ヶ池の東に架かる）両国橋で別れの歌を交わした、という逸話があり、歌舞伎「松浦の太鼓」の名場面にもなっています。

*年の瀬や　水の流れと人の身は*　（其角）
*あした待たるる　その宝船*　（子葉）

「子葉」は大高源吾の俳号ですが、この話は残念ながら史実ではないようで（其角の自作自演？とまで言われていま）す。

討ち入りの後赤穂浪士の中大石内蔵助始め17名が熊本藩お預けとなりました。その際、大石ら浪士を引き取りに赴いたのは熊本藩旅家老（他藩でいう江戸家老）だった三宅藤兵衛重経です。「三宅藤兵衛」の名前で皆様お気付きでしょうか？この三宅重経は、明智光秀の孫・三宅藤兵衛重利の孫にあたる人です。

当時の熊本藩主・細川綱利（1643～1714）は、ガラシャの曽孫なので、三宅重経と同じく明智光秀の玄孫です。熊本藩が江戸下屋敷（@港区高輪1丁目；昨年上皇夫妻の「仙洞仮御所」になった「高輪皇族邸」が建つ処）に浪士を預かるにあたって、夜中にも拘らず綱利自らが出迎え、直ちに二汁五菜の料理、菓子、茶などを出すよう命じました。翌日からも連日御馳走でもてなして、大石らから「腹に凭れるので料理を軽い物にしてほしい。」と言われたほどです。細川屋敷で過ごす間に、大石は藩士たちの血筋を尋ね、それに答えて接待役の藩士・堀内伝右衛門は、旅家老・三宅重経のことを「少し訳あり」として「先祖が明智日向守（＝光秀）家中の明智左馬之助（＝秀満）」と語っています。

細川綱利は、幕府に浪士たちの助命を嘆願し、助命が叶えば赤穂浪士を細川家で召し抱えたい、とまで願ったそうです。しかしそれは叶わず、元禄16年2月4日、浪士たちは切腹して果てました。芭蕉さんの孫弟子の子葉＝大高源吾もその日に（細川屋敷ではなく松山藩松平屋敷で）切腹しました。享年32。源吾は、辞世に次の句を詠んでいます。

*山をぬく　刀も折れて　松の雪*　（子葉）

浪士たちが切腹した後、綱利は「彼らは細川屋敷の守り神である」として浪士たちの遺髪を貰い受けて屋敷内に供養塔を建てました。

**［9］　お玉ヶ池（2）**

討ち入りの後、赤穂浪士は泉岳寺（@港区高輪2丁目）を目指しますが、その折本所の吉良邸最寄りの両国橋ではなく、（武家屋敷街を通るのを避けるため、隅田川東岸の）一ツ目通りを南へ下って一之橋を渡ります。もし両国橋を渡ったのであれば、その先（西）2kmほどにお玉ヶ池（「池」は既に無く、地名としてだけですが…）がありました。
それでは、ここで一旦お玉ヶ池へ戻りましょう。

そもそも歴史をずっと遡れば、明智光秀が織田信長の（そして、自身のでもある）「天下布武」の夢を打ち砕き、徳川家康の「欣求浄土」の人柱に立ったのは、439年前（＝1582年（天正十年））のことでした。

家康が礎を築き、光秀・家康両雄の名を戴いた三代将軍・家光が仕上げた泰平の時代（＝江戸時代）を経て、280年近く後の江戸の地で、光秀末裔である三宅艮斎と信長末裔である坪井信道（二代目）とが巡り逢いました。戦国の世に、生命を賭して戦うことで世のために生きる武将として出逢った者たちの末裔が、徳川幕府の落日の時代に再び見えた時、人々の生命を救い護ることを天職とする医師としてだったというのは、誠に感慨深いものがあります。そればかりではありません。見えただけでなく、世のため人のために（「植痘論文」にあるように）「力をあはせて」お玉ヶ池種痘所の開設に尽力したのです。彼等だけでなく、お玉ヶ池種痘所の「設立資金醵出者名簿」には（手塚治虫の曽祖父＝）手塚良庵の名が、（手塚治虫の「陽だまりの樹」では）文字通り並んで載っていることも、［6］でお話しました。

嗚呼それなのに、お玉ヶ池種痘所は開所僅か半年にして火事で焼けてしまいます。種痘所の再建にあ

たっては、ヤマサ醤油の濱口梧陵（はまぐちごりょう）の資金提供が大きな力になったことを[7]でお話しました。お玉ヶ池種痘所が東大医学部の源流だと解った今となっては、(今では誰も気に留めないようですが、本当は)我々卒業生は、ヤマサ醤油には足を向けて寝られないのです。もし日本がアメリカであれば(??)、「東京大学」は「濱口梧陵大学」だったに違いありません。アメリカの大学は(例えば「ジョンズ・ホプキンス大学」が「ボルチモア大学」ではないように)、開学時の主な寄付者の名前を大学名にするようですから…

手塚治虫の「陽だまりの樹」には、こんな台詞があります。

「大槻俊斎の家へ集まった手塚良仙や伊東玄朴達わずかな蘭方医の果てしない夢が東大医学部のもとを築いたのだった。」

この台詞の「わずかな蘭方医」の中に光秀の末裔・三宅艮斎と信長の末裔・坪井信道の両者ともが加わっていたのは、何とも素敵なことではありませんか!?

余り知られていませんが、東大医学部発祥の地はお玉ヶ池種痘所跡(@千代田区岩本町2丁目)とされています。ですから東大医学部は、ここに「お玉ヶ池種痘所跡」碑と、ご丁寧にももう一つ別に「お玉ヶ池種痘所記念碑」を建てています。

その中（うち）の「お玉ヶ池種痘所記念碑」の方は、「岩本町3丁目」交差点に立っています。その碑文には「この種痘所は東京大學醫學部のはじめにあたる」とあります。かつて東大病院耳鼻科の加賀君孝教授は「東大病院だより」(44号)にこう書かれました。

「種痘所の設立発起人は　…東大医学部のファウンダーでもある」

前回述べたように、お玉ヶ池種痘所は(鉄枠の黒い板の門だったので)江戸の人々に「鉄門」と呼ばれました。今の患者さんが東大病院を「鉄門」と呼ぶことはありませんが、東大医学部関係者は今でも東大医学部や東大病院のことを「鉄門」と呼びますし、東大医学部の同窓会は「鉄門倶楽部」です。今時の東大の医学生は、自身の学び舎の始まりが「お玉ヶ池種痘所」であったことを知る由もないかも知れません。でもそんな彼等も、いつの間にか江戸時代と同じ「鉄門生」と呼ばれるようになり、卒業すると「鉄門出身」の医師になってしまいます。そんな鉄門ですが、実は1912年に現在の正門が建つまでは、(その由緒正しさからすれば当然かも知れませんが、医学部だけでなく全)東大の正門だったのでした。

(これも余り知られていませんが)一昨昨年（さきおととし）・2018年は、東大医学部とその附属病院の創立160年の年でした。「東京大学医学部」の発足は本当は(?)その141年前(1877年)のことなのに、「160年」とは一体どういうことなのでしょう？　それは、東大医学部は「お玉ヶ池種痘所」開設をもってその「創立」としているからなのです。その証拠に(?)「お玉ヶ池種痘所記念碑」には、「この種痘所は東京大學醫學部のはじめにあたるので、その開設の日を本學部創立の日と定め…　いまこのゆかりの地に由来を書いた石をすえ、また別に種痘所跡にしるしを立てて記念とする。」と書かれています。「その開設の日」とは、1858年(安政5年)5月7日のことでした。

前回述べたように「本能寺からお玉ヶ池へ」の流れは、お玉ヶ池種痘所が医学所、東京医学校、東京大学医学部へと姿を変えて来たことによって、明治の世に(「江戸」から改名したばかりの「東京」の)本郷まで流れ着いたのでした。

ここ迄に、光秀末裔の三宅艮斎と信長末裔の坪井信道が「力をあはせて」お玉ヶ池種痘所を開設したお話をして来ましたが、種痘所が「医学所」になった後もその教授の中には、艮斎、信良、為春といった面々が居ましたので、医学所の時代になっても尚両家の協同は続いていたのです。

東京大学の開学時には学部長職はなく、医学部

長にあたる「医学部綜理」には、適塾＆西洋医学所出身でベルリン大学に留学した池田謙斎（1841～1918）が就任します。そして４年後（1881年）、東京大学医学部に「学部長」が置かれ、初代の医学部長になったのは、（三宅艮斎の長男＝）三宅秀（1848～1938）でした。「東大医学部のファウンダー（の一人・三宅艮斎）」の息子が東京大学の最初の医学部長になったという訳です。東大医学部の公式サイトには、「歴代医学部長」のトップに（お玉ヶ池種痘所の初代頭取で手塚治虫の曽祖叔母の夫である）大槻俊斎を挙げています。「種痘所は東京大學醫學部のはじめにあたる」からです。2代目は緒方洪庵、3代目に松本良順…と続いて、7代目に佐藤尚中、そして（尚中の娘婿・）三宅秀は、「東大医学部長」としては初代ですが「歴代医学部長」としては14代目の位置に挙げられています。

## “冬だって乗りきるぞ！”職員イベント

企画運営会議Ｃチーム　小松 晃

昨年は、春先から新型コロナウイルス感染症が世間を騒がせました。新型ウイルスという見えない強敵の襲来に世界中が恐怖し、様々な対応を迫られ、今もなお、それは続いています。吉祥寺病院でも年末に新型コロナウイルスのクラスターが発生し、患者様も職員も大変な経験をしました（詳細は別稿参照）。

しかし、収束までの緊迫した期間に限らず、昨年春からずっと、現場は緊張の連続でした。病院は入院生活で体力の落ちている患者様が多いため、ひとたび感染症が発生すれば、あっという間に拡大する懸念があるからです。高齢の患者様も多く、心配は尽きませんでした。患者様には、面会や外出外泊の制限をさせて頂いたり、手洗いや手指消毒、マスクの着用を口酸っぱくお願いしたり、三密を避けるために食事を二部制にすることをお願いしたりと、療養のあらゆる場面で早くよりご協力いただきました。職員も患者様以上に基本的な予防策を徹底した上で、いざ新型コロナウイルスが病院に入ってきた時にはどう対応するのかを日々考え、行動してきた一年でした。

秋口に一旦感染状況が落ち着きをみせていた頃には、さすがに疲弊感も見え隠れしていました。そう思った矢先の第３波襲来には、正直うんざりしました。何とかもうひと踏ん張りするために、何かみんなの元気が出る手立てはないかと考えるものの、三密は禁忌なため恒例の忘年会でパアーッと、というわけにもいかず…。

そこで、職員がちょっぴり楽しく元気になれるイベントが、企画運営会議プレゼンツ with 忘年会実行委員により12月に企画されました。題して“おいしいお弁当を食べて、冬だって乗り切るぞ！イベント”。用意された３種類のお弁当は、10年連続ミシュラン☆獲得の創作和食店や、ミシュラン「ビグルマン」認定のイタリアン、史上最高のロースと希少部位ザブトンを使ったＡ５ランク焼き肉専門店と、塚本院長も太鼓判の名店のものばかり。美味しくないわけがありません！しかも、このお弁当、豪華景品が当たる福引きくじ付きでした！！美味しいお弁当でお腹を満たした後は、どの職員もわくわくしながら福引き抽選日を心待ちにし、すっかり元気を取り戻したはずです。

年末のクラスター発生を乗り切れたのも、おいしいお弁当で心と体に栄養を補給していたから…と言っては言い過ぎかもしれませんが、今年も職員がちょっぴり気持ちにゆとりを取り戻せるようなイベントを企画する予定です。そして、感染症対策にも、患者様対応にも、吉祥寺病院職員は日々緊張感を維持し、一丸となって頑張り、さまざまな難局を乗り越えていきます。引き続きよろしくお願いいたします！

当院のおすすめメニュー

# 豚肉とブロッコリーのガーリック炒め

**1人分栄養成分**

エネルギー 175kcal
タンパク 18.5 g
塩分 1.1 g

## 材料（2人分）

豚肉小間切れ…… 160 g
Ⓐ 塩…… 0.8 g（4つまみ）
Ⓐ 醤油…… 4 g（小さじ2/3）
サラダ油…… 2 g（小さじ1/2）
ブロッコリー …… 100 g（1/3個）
赤ピーマン（人参でも可）… 20 g（1/8個）
Ⓑ ニンニク（チューブまたはチップ）… 1.2 g（チューブの場合約2cm）
Ⓑ 塩…… 0.6 g（3つまみ）
Ⓑ こしょう…… 少々
Ⓑ 味の素……0.2 g（1）

## 作り方

1. 豚小間切れにⒶの調味料を揉み込んで下味をつける
2. ブロッコリーは一口大、人参は短冊に切り茹でておく
3. 温めたフライパンに油をしき、❶を色が変わるまで炒める
4. ❸に火が通ったら❷の具材を合わせ、さらにⒷの調味料も加える
5. 全体に味がなじんだらお皿に盛り付ける

《ブロッコリーの豆知識》
ブロッコリーは栄養素の中でも特に豊富に含まれているのはビタミンＣです。ビタミンＣと聞くとレモンを思い浮かべる方が多いのではないでしょうか。実はブロッコリーに含まれるビタミンＣはレモンの約2倍といわれています。
また捨てられてしまう事の多い茎の部分には、つぼみの部分よりも栄養が豊富なのです。
お料理の際は茎の部分まで使用するよう心がけましょう。

# 外来担当表

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 診察室 (1) | 原藤 | 院長 | ― | ― | 原藤 | 原藤<br>(第一・第五) |
| 診察室 (2) | 市川 | 市川 | 岡田 | 市川 | 市川 | 亀山 |
| 診察室 (3) | 田澤 | 西岡 | 西岡 | 田澤 | 西岡 | 西岡 |
| 診察室 (4) | 森 | 岡田 | 森 / 森 (栄) | 岡田 / 鈴木 | 森 | 森 |
| 診察室 (5) | 清野 | 山室 | 山室 | 山室 / 畑 | 畑 | 山室 |
| 診察室 (6) | 土井 | 土井 | 南 | 土井 | 岡田 / 土井 | 狩野 |

## 受付時間

月~金　午前 9時～11時 (初診・再診)
　　午後 1時～ 3時 (初診)

土　午前 9時～11時
　　午後も入院は受け入れています

当院は「敷地内全面禁煙」です。

調布市深大寺北町4-17-1

## 編集後記

新型コロナウィルスの流行から1年以上たちコロナ疲れを感じるようになり、気分転換にドライブを楽しんでいます。今は近場で我慢ですが、収束後は日本全国を回ってみたいです。

(N.Y)

「令和も２年目を迎え、今年の冬は当院でもインフルエンザが蔓延せず良かった良かったと思っていたら、コロナウイルス感染症とは…皆さんがこの号を読んでいる頃はどうなっているのかわかりませんが、現在は緊急事態宣言が出て不要不急の外出を自粛しています。」
なんとびっくり！令和２年の４月に書いた編集後記と今年もほぼ同じ状況とは！？
この号がお手元に届くころはわかりませんが、現在は病院の周辺地域（２３区・調布市・武蔵野市・府中市）にまん延防止等重点措置が出ております。私はお酒を嗜みませんので、なんとなく縛られている気分を味わっているだけですが、新入社員と飲みニケーションすることが出来ない先輩たちが不憫です。

(sutekijyoshi)